

子育てで一番大事なのは
よい夫婦関係だと思う

——一男三女のお父さんでもあるつるのさん。素敵なパパとしても注目されていますが、子育てで「これが一番大事」というものを教えてください。

つるの剛士(以下、つるの)

まず、子どもがどうの、ということよりも、一番大事なのは良い夫婦関係。僕はずっとそう思っています。夫婦でコミュニケーションをしっかり取って、ストレスをなくして、お互いによい関係を作っていくことが一番の育児。子どもは親のことをよく見ていますからね。

僕は育児書を読んだことがないので、自分の人生経験や自分が親にもらったことが、子育ての基礎になっているんです。ちなみに、僕の親は放任主義でした(笑)。

——夫婦関係と言えば、今春ご出演されたドラマ『名前をなくした女神』は、ママ

友にスポットを当てつつ、複雑に絡み合うその関係が描かれていましたね。

つるの あのドラマでは夫婦関係が直接的に子どもに性格や生活に影響している、というのがわかりましたね。

僕が演じたのは秋山家という家族の父でしたが、その家が自分の家庭とわりと似ていて。ほかの家庭は夫婦関係がギクシャクしていることが多かったけれど、秋山家は夫婦関係がうまくいっていた。それが、よい育児につながっていた……ということ、自分が考えてきたことは間違っていなかったんだと確信できました。

どこの家庭も夫婦の関係が崩れたときに、何か問題が起こっていきますよね。

お互いの足を引っ張るようなママ友同士の恐ろしい関係性も強く描かれていたのが、ああいうのは実際にあるところではあるようなんです。でもこの問題も、解決には夫婦関係が肝。だつて、家で旦那さんにいろいろ

話せないから外で極端なところで発散しちゃうわけでしょ？ ちゃんと話をできる関係であれば、ストレスはそこまでたまらないと思うんです。

——なるほど。やはり、奥様とは昔からいろいろと話されていたのですか？

つるの はい、昔はやっぱりぶつかることも多かったですけどね。やっている仕事も考え方も違う、おまけにふたりとも我が強いんです、言い争いはしょっちゅう。でも、そんな日々を経て、お互いトゲを削りあって丸くなって、だんだん「つるの家のかたち」というものが出来上がってきた気がしています。僕、考えをちゃんと口に出すというのは大事だと思っています。親としての考えも、愛情表現もそう、全部口に出すことでわかり合える部分は大幅に増えると思います。

——普段、どんなときに話

Profile

1975年5月26日、福岡県出身。1995年から『太田プロダクション』に所属し、翌年に俳優デビュー。2007年には『羞恥心』のリーダーとして、音楽の世界でもその名を広める。以来現在まで、俳優、タレント、ミュージシャンとして幅広く活躍。プライベートでは、2003年に結婚。1男3女をもうけ、2009年には「ベスト・ファーザーイエローボン賞」を獲得している。



すが、僕自身はその結構前、NHKで育児系の番組に出演させてもらっていたときに知って、以来「いつか取りたい」と思っていたんです。ただ、そう思ってから二、三年、メチャクチャ忙しくなって、ほとんど家に帰れない状況が続いて……。その状態は僕自身も悲しかったし、このまま家庭をおろそかにすると仕事もうまくいかなくなるということも分かっていたんで、もう思い切って「四人目の子どもが生まれるのをきっかけに、休みを取ろう！」って。それで、ベストファーザー賞をいただいた舞台上で「育児取りまーす」って宣言しちゃって。事務所には言っただけだったので、「え？ 聞いてねー」みたいな感じになったんですけど。でも、取ったんですよ(笑)。

——二カ月間どんな生活でしたか？

つるの 毎朝子どもたちの弁当を作って、保育所に預けて、奥さんとランチに

をされているのですか？

つるの ふたりでお茶やランチに行くことはよくあります。そんな時間は一番楽しいですよ。いまは家族旅行でも子どもが大騒ぎでゆっくりはしてられないんで、旅行先では「いっかふたりでここに来ようね」って、奥さんとひそひそ。子どもたちがすくすく成長し&旅立ち、早く奥さんとふたりきりでデートしたいっすね(笑)。

自身の親や育児休暇から知る夫、父としての子育て

——つるのさんが子どもだった頃の、親子間での印象的なエピソードを教えてください。

つるの ひとつ、本当に忘れられないのが、高校時代に万引きをしたときのこと。これまでの人生でした一番悪いことだと思ってるんですけど、そのときの父の反応はすごくよく覚えています。万引きが見つ

行って、保育所へ迎えに行くついでに子どもたちと海なんかへ遊びに出かけて。夜になったら風呂に入れて寝かせて……。というような生活です。

たった二カ月の育児でしたが、「奥さんは毎日同じ生活をしている」、「あの時間は大変」、「あのときに必要なのはあれ」ということを知れたのは、大きな収穫だったように思います。そのおかげでいろんな気遣いが出来るようになりました。から。育児前、周りの人たちからは「復帰できないんじゃない？」と脅されていましたが、いざ復帰となったときは、思ったよりも気持ちの切り替えがスツとできました。で、初日から「二十四時間ずっと釣りをする」という芸能界ならではの仕事をしました(笑)。

バカだったから夢を全部叶えられた

——芸能界に入りたいとい

かってお店の裏側に連れていかれて、そこに両親を呼ばれたのですが……。うちの父は銀行員という固い職業だったので、僕のせいで仕事が悪くなったとすくすく心配になりながら両親の到着を待っていました。それで、絶対にものすごく叱られると予想していたら、父は全然叱らなかつたんです。到着して開口一番、「これがお前ののはじめてした悪いことなんだから、もう二度とするな」というひとりで終わり。この言葉が胸に刺さって「もう悪いことは絶対にしない」と思いましたね。あのしつけはすごかつた、いまでも思います。

——二〇一〇年、四人目のお子様が誕生された後に二カ月間の育児休暇を取られました。いまの日本ではすごく勇気のいることですよ。

つるの 育児を取った二〇一〇年当時、父親の育児の認知度はまだ低かつたんで

う気持ちは、いつから持っていたのですか？

つるの 小学二年生のときからです。隣の席の女の子が子役で、撮影で学校を休むのがかつこよく思えて。欠席なのに話題になつてるのも。だから僕も芸能界に入りたいと思ったんです。それからいろんな人に「芸能界なんて無理だ」と言われたけれど、逆に「なんで？」ってずっと思っていました。真剣に。いまになって思えば、本当にいい意味でバカだったんだなって気がします。

ひたすらシンブルに思い続け、そこに向かって集中するというバカのパワーって、実はすごいですよ。夢を叶えるためにしたことは「やりたいことをやるにはどうしたらいいか」を考えて、ただ動くだけ。「迷い」もなかつたですね、シンブルなバカで良かったですよ(笑)。いまは、幼稚園の頃のウルトラマンになる夢、小学校の頃のテレビに出る夢、高校の頃の